

# 第 12 期 pES club シナリオ 1

平成 25 年 1 月 20 日

聖路加国際病院附属クリニック 聖路加メディローカス

池亀 俊美

東京北社会保険病院 総合診療科

南郷 栄秀

<http://spell.umin.jp>

あなたは、海老伝巣医科大学附属病院の循環器内科系一般病棟に勤務する 3 年目看護師です。

あなたは明日の午後より、心臓集中治療室 (CCU) から転入してくる古路万世さん (77 歳女性) を受け持つことになりました。

古路さんは僧帽弁閉鎖不全症、大動脈弁閉鎖不全症があり、慢性心不全の急性増悪にて過去 5 回の入院歴があります。今回も慢性心不全の急性増悪で緊急入院し、今日は緊急入院の 3 日目です。現在、酸素鼻カヌラ 2L/分、利尿剤とヘパリン (抗凝固薬) の点滴と経口薬の治療を継続しており、心不全は軽快傾向にあります。入院翌日から食事も開始し、昨日から少しずつ食欲も出てきたようです。排泄は、CCU ではベッドサイドに設置してあるポータブルトイレで行っています。

CCU 担当看護師からあなたへの申し送りの際、古路さんは次のように話していると聞きました、「一般病棟に移ることができて嬉しい。一般病棟に移ったら、一人でトイレに行っても大丈夫よね。早く一人でトイレに行きたい。トイレの都度、看護師さんと呼ぶのは申し訳ないわ」。

しかしあなたは、まだ酸素や点滴も付いているし、一般病棟では看護師が常にすぐそばにいるわけではないから、転倒してしまう可能性があるのではないかと気になっています。折しも、このところ病棟で転倒のインシデントが頻発していて、大腿骨頸部骨折を起こしてしまった患者さんもいます。古路さんには転倒の危険性をなんとか理解してもらい、転倒が起こらないようにしたいと思います。

そこで、一般病棟に移動してくる古路さんに、入院中に転倒予防のための患者教育を行うことが有用か、さっそく調べてみることにしました。

# 第12期 pES club シナリオ 1(追加シナリオ)

平成25年1月20日

聖路加国際病院附属クリニック 聖路加メディローカス

池亀 俊美

東京北社会保険病院 総合診療科

南郷 栄秀

<http://spell.umin.jp>

古路さんは身長 153.0cm, 体重 41.90kg です。室内は独歩可能ですが、屋外では杖や車いすを用いています。転倒歴はなく、転倒しそうになったこともありません。視力に問題はありませんが、老眼鏡を使っています。

利尿剤を飲んでいるため、1日に7~8回トイレに行きます。行けるうちは自分で行きたいと思っています。認知機能は問題なく、転倒予防のための教育を十分に理解できます。もし転倒して大腿骨頸部骨折を起こした場合は、心不全の状況から手術ができないため、寝たきりになることも理解しています。ワーファリン内服中のため、脳出血を起こすとやはり寝たきりになる可能性があります。家族と相談して、弁膜症の手術はしないことに決めています。また、睡眠薬を定期的に内服しています。

食事制限のせいで、今までのように好きなお芝居や外食、旅行が思うようにできず、生きていてももう楽しいことはない、早くお迎えが来ればいいのに、という言葉が聞かれました。でも心不全のコントロールがいい時は、復帰できるかもしれない、出かけられるかも、と前向きな発言をしています。

古路さんは76歳の夫と年金暮らしをしており、会社員の長女(45歳)とも同居しています。趣味は編み物で、心不全で入退院を繰り返す前までは、週1回、バスと電車を乗り継いで、隣駅の編み物教室に通っていました。教室の友人とカラオケに行ったり、以前の入院中に知り合った心臓病を患った友人と食事に出かけたりしましたが、現在は電話で話す程度です。

体重と食事内容を毎日日誌につけていますが、細かいことは気にしない性格で、明るく、マイペースです。そろばんが得意で、結婚するまでの数年は会社事務員で経理などを担当していました。自転車には小さい頃から全く乗れません。

夫も長女も古路さんの介護に協力的です。夫は通院や近所への買い物の際に車で送迎し、車いすも押してくれます。娘は週2回、入浴介助をし、仕事が休みの時は食事も作ってくれます。普段の食事は、蛋白・塩分制限のレトルト食品やお弁当、夫が買ってきたお惣菜などです。また、介護ヘルパーが週2回、1回2時間来て、主に部屋の掃除をしてくれます。車で20分ほどのところには息子夫婦と3歳の孫が住んでいますが、月に1回顔をみせる程度で、介護や通院などの手伝いはしてくれないようです。

海老伝巢医科大学附属病院で最近頻発している転倒インシデントは、トイレ介助中に「終わったらナースコールを押してください」と患者に伝えてあるのに、ナースコールを押さずに自ら動いて転倒してしまうというものです。対策として、トイレ介助を受け持ち看護師以外の者が対応したり、「トイレ介助中はそばにいます」というカードを作成したりしました。なお、個室にはトイレがあり、ベッドからトイレまでの距離は3~5m程度です。

現在、転倒予防の患者教育は行っていませんが、入院時に転倒や転落のリスクアセスメントを行い、それに基づいて対策を説明し、同意を得た上で実施しています。